

「大学と美術館の相互協力による博物館実習の 取り組みの可能性について」研究報告

A Possibility of Cooperation between University and Museum in Practical Study

江本菜穂子

EMOTO Nahoko

はじめに

研究目的

本研究の目的は、大学における博物館実習科目を実際の美術館との相互協力のもとに具体的に組み立てる方法を考察する研究である。

名古屋造形大学では、学芸員の資格取得のための授業の一環として博物館実習単位が設定されている。その実習単位についてのうちわけは、博物館実習Iとして3年生で2単位、博物館実習IIとして4年生で2単位を履修する。4年生での博物館実習は本学が大学内に美術館や博物館に相当する施設を持っていないため、学外の美術館等で実習することになる「館務実習」と「事前・事後の指導」である。3年生で行われる博物館実習Iの2単位については、学内のプログラム(本学では「美術史実習」(「日本」、「西洋」、「現代」から学生は二つ選択必修)となっており、この学内で行われる実習授業についての新しい取り組み、つまり大学と美術館の相互協力による授業プログラムが今回の研究テーマとなる。それは具体的には、大学の学生にとってより実践的に博物館実習単位として実感できる有効な実習プログラムとなりうるものである。

そのために、この研究の目的実践していく方法の一つとして、(1)実際の美術館の協力を得ることで、本来大学内部だけで行っていた授業をより実践的に可動することができないか。(2)美術館サイドも、ただ学生の授業に一方向的に協力するだけでなく美術館にとってもそのことが美術館に有意義な形として展開できるような協力の体制になることができないかを実践しながら模索する。

大学と美術館の相互協力によって双方間の連携が密となり、開かれた授業形態を作り出す可能性につながり、より実践的な効果が引き出せるような「博物館実習」を試行しながら考察していくことにある。

1. 研究に至る経緯

まず、この大学と美術館の相互協力による授業を考えるきっかけになったこれまでの経緯について説明したい。

実際の美術館との連携を実践する以前、この授業(本学では科目名「美術史実習『西洋』」)は 授業内容として以下のことを

課して実行してきた。

- ①自分の興味のある西洋の美術館を一館選ばせる。
- ②その選択した美術館のコレクションや美術館のことを調べさせる。
- ③それを基にして自分で展覧会の企画を立案させる。立案に先立って、学生は自分の興味を持った作品を1点選び、その作品を企画の主作品として調べる。
- ④そしてその主作品を核にしなが、展覧会の企画主旨を作成する。この時、展覧会企画の作品選択は15点から20点ほどに限定しておく。
- ⑤次にこの仮想企画によってできた展覧会の図録を作成させる。主作品は詳しく調べ上げたことを自分で文章にして解説文を作成し、そのほかの作品にも主作品よりは簡単ではあるが、解説文をつけさせる。
- ⑥こうしてできた仮想の展覧会企画を、子供むけに何らかの教育ツールにして子供が楽しめる形に作成させる。
- ⑦最後に学生には、自身の企画した仮想展覧会のオリジナルミュージアムグッズを考案させ、大人用の図録に載せる。
授業としては、これらの作業をさせるだけではなく、必ず主たる作品の研究を発表させ、企画主旨のプレゼンテーション、展覧会のネーミングなどをその都度授業内で展開させ、第三者に解りやすいものができているかどうかをチェックしあう。
総体的に簡単な作品研究、企画、発表、図録制作が体験できる授業になっている。

こうした授業内容の背景には、まず世界的に有名な美術館については、充実したコレクションを持っていること。西洋の美術館自体の多くが成立の歴史もあり、美術館の存在意義というものを考えることができること。若い学生たちには、思い切って自由な発想で企画が立てられるように収蔵作品が多い美術館を選択させてやれること。以上のように美術館はこれらの条件が揃っているだけでなく、学生が調べる時に参考文献やウェブ上での検索も美術館のホームページ等が充実しているので学生自身が調べやすいことからの理由である。

このプログラムで授業を実践してみると、本学の学生の資質や特徴というものが顕著になった。それは、ただ単に調べさせる一例えば、作品研究や歴史的な背景等一だけでは、なかなか理解が進まないこと。換言すると文章だけの把握、レポートや発表だ

けでは完全に理解しきれていないことが多々あることである。ところが、それが何等かの具体的な形(ここでは図録等)を最初からイメージさせてみると、俄然具体的な理解度や把握が進んでくる。つまり、最終的に図録として目に見える形で自分たちの調べてきたことを作成させると、それまでの授業経過から考えて思っていた以上の「形」に仕上げ、デザインだけでなく中身の充実も増してくるのである。「形」のイメージが出来上がってくると、それに比例して学生本人たちのモチベーションも高まり、アイデアも彼らなりに展開できるようになってくるのである。最終的に形にして作成することが、むしろ発想の豊かさやクリエイティブなデザイン等を発揮でき、芸術系の学生には苦痛ではなく、しいては作品理解にも反映されてくるのである。

もちろん、こうした現象は芸術系の大学の学生に限ったことではないかもしれないが、ただ、やはりあるひとつのこと調べて、初歩的ではあるが次の段階まで高めようとする時、芸術系の大学の学生にとっては、先に目に見える形のものを作らせることで効率よく理解できるようになるということが授業を繰り返して再認識させられた。

ここで私が注目したのは、図録、子供用の教育ツール、ミュージアムグッズ(これに関してはイメージ図だけであるが)という学生作品が、他人に見せてもいい位のかかなりのレベルまで到達したものになっていることである。形だけでなく、企画のユニークさ、発想力のレベルの高さ等、単に授業内に留めておくにはもったいないと思える作品が現われていた。勿論程度の差はあるが、学生の企画力や表現力はプロの学芸員が思いつかないような奇抜さや若さゆえの面白い発想もあって、ヴァラエティに富んで実に魅力的であった。

そこで、いっそこれらの学生の作品を美術館とタイアップしてある展覧会に仕立てられないかと考えたのである。今まで世界の有名な美術館で仮想企画を学生にイメージさせたことを、身近により具体性のある美術館で実践することに可能性を求めたのである。

そして次の段階で、美術館との交渉に至る。

学生の作成した仮想展覧会図録を実際の美術館の学芸員に見ていただくことにした。

美術館の選択として、名古屋造形大学と開学当時より関係が深く、大学から一番近くにあるメナード美術館(小牧市)に交渉し、協力の依頼をした。美術館のサイズも大きくなく、所蔵作品は小品が多いが質が高く、西洋の美術も日本の美術も名品が揃っており、この授業にとって申し分のない条件である。加えて重要な

ことは、メナード美術館は博物館実習の外部からの大学生を引き受けていないことも好都合であった。(何故ならば、本大学の近くの美術館なので学生は4年生で館務実習をメナード美術館であることを選択すると、再び同じような実習を受けてしまう可能性があるからである。)

学生が今までに作成した図録を見て判断をおおぎ、美術館から理解を得ることができ、その結果、協力を快く引き受けてくれた。

美術館は、授業期間内の展覧会の入場料を無料化、学生に必要な図録の寄付など具体的に協力体制を整えてくれることになった。こうした援助協力のほか、会場提供と学生の図録を展覧会として展示する期間の話し合い等々、具体的に担当者話し合い、はじめて美術館と大学との協力のもとでの新しい試みの実習授業を開始することができるようになった。

2. 研究方法並びに実践方法

この研究は、あくまでも大学で開講している「博物館実習I」の中で行われるものであり、授業形態としては、半期15週の授業で1週間に1日2コマ、合計30コマで完結する。

- ・学生たちはメナード美術館のコレクション展を鑑賞し、学芸員から美術館について、並びにコレクションについての説明の講義を受ける。そして美術館の建物や空間から、自分の企画で展覧会を開催することを仮定して、展示室のイメージなどを具体的に体感する。
- ・メナード美術館の所蔵作品から自分が気に入った作品を選び、主作品を決めてそれを基にして、少なくとも半分はメナード美術館のコレクション作品を使い、それ以外は他の美術館等から自由に作品を借りてくることにして、学生独自の展覧会を企画させた。発想の自由さをなるべく活かすために、借りてくる作品は(実際には明らかに不可能と思われる無理な場合も多いが)若い学生の企画が小さくならないように自由にした。
- ・そして、その仮想企画の図録を最終的にメナード美術館のアネックス・ホールで展覧会として一般の方たちに見ていただくのである。美術館も公式にこの学生の仮想展覧会図録の展覧会をメニューとして美術館カレンダーに入れて宣伝してくれた。

第1回目、メナード美術館のアネックス・ホールで展覧会開催。平成26年12月6日～26日まで。展覧会の名称は「LOVE me TENDER」展とした。因みに「me」を「MENARD」の頭文字とひっかけて、「メナード美術館を愛して」という気持ちでネーミングしている。

この展覧会は大学と美術館との相互協力の初めての試みで

あったがとても好評で、美術館本館の展覧会を鑑賞後、一般の方たちはアネックスに回って入館して、鑑賞した方たちは丁寧にアンケートにも答えてくれた方もかなりいた。

学生たちも努力して作成した図録等が実際の美術館に並んで、一般の方たちに見ていただけることが励みになっていた。

学生の仮想企画として、「西洋絵画に学ぶ配色展」「絵画の温もり展」「サーカスの舞台裏」「纏う」「読む 見る 考える女性たち」など次々にメナード美術館のコレクションを使ってならでの展覧会企画が出てきた。

子供用も絵本に仕立てたり、クイズ形式にしたり、子供が喜ぶ形を作って解説を載せたり、ユニークなそしてすぐに使用できそうなものが登場した。

ミュージアムグッズも、メナードが化粧品会社なので、「西洋絵画に学ぶ配色展」ではマニキュアのビンのデザインやアイシャドウパレットのケースデザイン、「絵画の温もり展」では「温もり」にひっかけてデザインのきれいなカイロなど、グッズ考案も芸術系大学の力量発揮といった感で楽しませてくれた。(写真1～写真5)



写真1 メナード美術館本館と別館



写真2 LOVE me TENDER展



写真3 学生の図録作品の数々



写真4 大人用図録と子供用ツール



写真5 「男と女 やんのかコラァ」展図録

反省点として、①アンケートに答えてもらうのに、どの図録のことを指しているのかが、わざわざ学生の展覧会の題名を書いてもらわなければならない、面倒であったこと。②きちんと製本ができていないわけではないので、手に取って読んでいただくうちに壊れてしまうこと③学生は締め切りまでぎりぎりで作成するので、文章のチェックがすべてにはできないこと、それによって誤字などがあつたこ

となどがあげられた。

初回が好評で、それなりに成功したので、翌年もメナード美術館では2回目を開催することを了承してくれた。さらに、期間も初回より少し長く設定することを提案してくれ、ちょうど、美術館として会場が開いていることや、クリスマス等のイベントで同じアネックス・ホールで催し物が開催されることも、一般の方たちがこの学生たちの「LOVE me TENDER」展を鑑賞してくれる機会になるからという積極的な提案の申し出をしてくれた。

第2回目 メナード美術館のアネックス・ホールで「LOVE me TENDER」Part 2 として、平成27年12月10日～平成28年1月11日まで開催。

第1回目の反省から、アンケートは学生の展示作品に番号をつけ、番号で答えていただくように改良した。製本の破損については、学生が制作する際になるべく頑丈にと指示を与えたが、やはりある程度は仕方なく、その都度何かあった時は補強するようにした。

1回目と同じ美術館なので、似たような発想で1回目の学生の図録企画と変化が生じるか懸念されたが、思っていた程企画の重なりは少なく、学生は独自の発想でユニークな展覧会案を企画してくれた。

例えば「絵画系男子」展は雰囲気として、どちらかというと女性向けになっている美術館に男性を描いた男つまい展覧会を仕組み、そのことを今時の言葉の使い方で「絵画系」と表現してネーミングを作った。この企画展の子供用教育ツールでは男の子の可愛い着せ替え人形ができており、大人用マッチョな図録のイメージとのギャップの面白さ、さらにはミュージアムグッズとしてプロテインを販売し、そのパッケージは半裸の男性といった遊びごころもオリジナルの楽しさがにじみ出ている。

「時を刻む」展では、絵画が一日のどの時刻を描いているかを朝、昼、夕暮れ、夜といたように選び、全てを見て回ると1日の時間が流れていくといった時の流れをうまく使った企画展を考え、ミュージアムグッズでは腕時計や絵日記といった「時を刻む」に相応しい品が考案されていた。その他「森の絵画展」では森にピクニックに出かけていく人の目で、森の入口、森の中、ピクニック、森から高原へ、そして庭へとといった部屋に分け、実際に美術館を森から移動していくように絵画を展開させたものだった。この場合の子供用教育ツールは絵本、グッズはピクニックシートやバスケットと企画に即したグッズが考えられていた。その他、永遠の憧れの少女らしさをアピールするものやストーリーまんがを使って油絵の描き方を解説してくれる子供用ツール、帽子に注目した展覧会等、前回とはまた異なった力作が並んだ。(写真6～12)



写真6 2回目メナード美術館での展覧会
LOVE me TENDER part 2



写真7 学生の図録作品の数々



写真8 「ハットではっ」と展図録



写真9 「絵画系男子」展 大人用図録と子供用教育ツール



写真12 新聞掲載記事



写真10 学芸員からの講評会の様子



写真11 作品の解説を受講する

このようにして、2年間メナード美術館で2回の展覧会を開催したが、次の展開として学生の発想のマンネリ化を防ぐために、3回目は新しい別の美術館を探すことにした。最初は一宮市三岸節子記念美術館を考えた。大学から授業内時間でどうにか行くことができ、規模といい、展覧会の種類といい美術館実習授業にとって条件が揃っていたのであるが、残念ながら美術館が平成28年度は改装工事に入ってしまうために、大学の前期期間での展開が不可能であった。そこで、本大学からの距離としてはかなり遠いが、現在活発に展覧会を仕掛けて活動をしている碧南市藤井達吉現代美術館をお願いをした。前回のメナード美術館の学生作品を見て判断して結果として快く引き受けていただいた。

碧南市藤井達吉現代美術館は、その名前の由来からも理解できるように藤井達吉の作品を主たるコレクションにしながら、美術館活動としては日本から西洋美術、現代美術に至るまで幅広く活発な展覧会を組織しており、内容としても美術館の規模も授業として協力していただくのに最適な美術館であった。様々な大学からの館務実習を受け入れている美術館ではあるが、名古屋造形大学からは距離的なこともあり、殆どここで実習を希望する学生がないことも条件として有効であった。本学からは距離的な点だけが少し問題であったが、大学のスクールバスを使用しながら授業内で行き来できるように工夫し便宜をはかった。

碧南市藤井達吉現代美術館の学生の仮想展覧会図録展は、「Back to the Fujii Tatsukichi」展というネーミングにした。(これは「Back to the Future」のもじりで考えたものである。)

美術館は授業にあたって、メナード美術館と同様に、学生への図録の提供や入館料の無料化など多岐にわたり多くの便宜を図ってくれた。メナード美術館では西洋の作品を企画の主とした

が、こちらの美術館では、学生は主として藤井達吉の作品を基にしながら、西洋の美術作品との組み合わせで展覧会企画を組むことを指示した。

作品の解説もほとんどは自分で一から考えることも多く、文章化するのが得意でない学生にとってはとても難しい課題であった。「美術館としては、展覧会として既にスケジュール化していること」を最初の授業で念を押し、「締め切りまでに必ず作品を出すこと」も確認しながら進めたが、学生たちは何度も挫折しそうになる場面があったが、どうにか乗り越えて、展覧会初日を迎えることができた。

この美術館での仮想企画として学生が考案したのが「おなかへってん」「より鳥み鳥」展といった面白いネーミングの企画展から、藤井達吉の作品が花をテーマとしているものが多いので、「暮らしに花を添えて」「かぞえ花展」、工芸作家としての藤井の作品に注目して「纏う美」展などが提案された。また、「月夜の散歩道」では月を描いたさまざまな作品を揃え情緒豊かな美しさが企画に感じられるものに仕上がっていた。「MIYABI-金への眼差し」展ではやはり金を使った作品のヴァリエーションを展開してくれた。「達吉とモランディ」という形と色に注目して絵画手法の組み合わせを企画した学生もいた。

「おなかへってん」展では発想は描かれた野菜等から食欲へと向かうもので、意味として「おなかが減った」をかけて題名を作っている。子供用教育ツールでは小さな子供がお腹が減ってむしゃむしゃ食べると食物の色に身体が変わるという絵本、グッズは美術館のカフェで絵画に登場した素材を使ったメニューが出されるというものであった。「より鳥み鳥」は絵画に表現された鳥を集めたもので、子供用にはバードウォッチング用ツールが用意され、展覧会場の作品から鳥を探すように考えられていた。「月夜の散歩道」は自分の企画展のポスターも作っており、完成度の高い作品図録になった。「MIYABI-金への眼差し」のミュージアムグッズは、男性用のパンツ、女性用の下着が考案され、なかなか奇抜な発想の面白さが受けていた。(写真13～22)



写真14 藤井達吉現代美術館を見学する



写真15 学芸員の方に企画展の説明を受ける



写真16 Back to the Fujii Tatsukichi展



写真13 藤井達吉現代美術館



写真17 学生たちで展覧会の会場設定と搬入をする



写真20 「暮らしに花を添えて」展図録



写真18 会場設定が完了



写真21 会場で相談する



写真19 並んだ作品の数々



写真22 学生自身による企画展のための「月夜の散歩道」展ポスター

学生は美術館の作品コレクションを理解した上で、自分たちの自由な発想へとつなげることが出来ていた。

美術館が提供してくれた会場が広く、学生は自分たちで会場をパーティーションを使いながら工夫し、ライティングも自分たちですべて工夫し会場を作った(実技を学ぶ学生たちなのでこの点は慣れているのであるが)。学芸員の方の助言もいただきながら、積極的に自分たちで考えて展示し動くことができた。

3. 成果と課題

まとめ

平成26年度初回と平成27年度2回目はメナード美術館の協力を経て、実践的な仮想展示会の図録展が開催され、平成28年度は碧南市藤井達吉現代美術館の協力のもと展示会の開催が行われた。1回目は手探り状態から始まったが、学芸員の方たちの評価も高く、一般の方たちのアンケート^{注1)}も評判が良かったので、2回目は展示期間も長くしていただくことができた。

展示に関して1回目の反省を活かすように、展示方法も改善を加えた。1,2回と同じメナード美術館との協力で授業を進めたが、前述したように学生の企画する際のマンネリ化をふせぐため、3回目は公立のタイプの違う美術館をお願いすることにした。それが碧南市藤井達吉現代美術館であった。

その結果 以下の美術館との相互協力のもと、3回の展示会を開催することができた。

平成26年度

メナード美術館(2014年12月16日～12月26日)

平成27年度

メナード美術館(2015年12月10日～2016年1月11日)

平成28年度

碧南市藤井達吉現代美術館(2016年7月12日～7月31日)

こうして新しい試みとして、今まで大学内だけで授業をしていた「美術史実習(西洋)」科目を具体的に実際の美術館と組むことで、学生はより実践的に関わりながら学ぶことができたと考えられる。美術館としても、学生の思い切った発想の面白さや今の時代の若い人の考えていることを把握することができ、美術館に若い層がこれから入館してくれるためのヒントにもなり、有効な協力関係をつくることができたのではないだろうか。

どの3回の展示会も新聞社がその学生の仮想企画展取材して、記事として掲載してくれた。^{注2)} ここにも美術館と大学の相互協力で行うオープンな新しい試みが評価されたと感じて

いる。

学生たちは、最後に美術館の展示会場で学芸員から実際に講評を一人ずつの作品にもらい、それは授業を指導する教員の目とはまた異なった視点から現場からの意見として学生たちにはとても有意義であった。さらに一般の方たちからのアンケートは学芸員や指導教員とはまた異なった意見が多くあり、これらの違いも参考となった。

課題としては、この授業は学生の履修人数がその年度によって違うので、学生数により展示会にする作品数にボリュームのばらつきがでてしまうことに難点がある。

アンケート意見の違いをそれぞれの観点から考察してこれらをどう今後のステップに反映していくかを研究していくことになる。

図録、子供用教育ツール、ミュージアムグッズを考案させると、概して学生たちの子供用教育ツールの出来栄は素晴らしく、すぐに美術館でも使用できるようなヒントになっていくものも多かった。それに比べて、大人向けの図録は、発想は面白く、楽しいものも多いが、解説文章作成に少し訓練が必要であると実感した。

しかし、大学だけでなく、美術館だけでなく、相互に協力して授業をオープンにしていく形態は、これからもより有効な授業プログラムになることが期待できると感じている。

鑑賞者のアンケートを含めて、一般の鑑賞者の方たちを入れてより開かれた授業形態も可能になってくると期待することができる。今後も、大学の博物館実習がより多くの美術館等との相互関係で授業が開催できる方向になるように、方法を模索し実践していくことを探っていきたい。

付記

この研究は、全国大学博物館学講座協議会西日本部会の平成27年度助研究助成金を受け実施したものです。平成28年12月9日に開催された平成28年度全国博物館学講座協議会西日本部会で報告発表したことに基づいております。

この授業と研究をするにあたり、惜しみない協力をしていただいたメナード美術館、碧南市藤井達吉美術館には心より謝意を表します。

注1：第1回展示会 アンケート数 19枚

第2回展示会 アンケート数 41枚

第3回展示会 アンケート数 28枚

注2：第1回目「LOVE me TENDER 展について」朝日新聞 H.26.12.16 掲載

「大学と美術館連携のアイデアとして」大学新聞(大学新聞社) H.27.2.5 掲載

第2回目「LOVE me TENDER part2 展について」中日
新聞 H.27.12.18 掲載

第3回目「Back to the Fujii Tatsukichi 展について」
朝日新聞 H.28.7.13 掲載と中日新聞 H.28.7.14 掲載